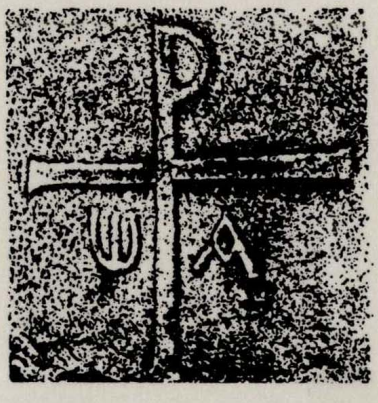
教えの手ほどき

アウグスチヌス　熊谷賢二訳

キリスト教古典叢書 4



上智大学神学部編
P.ネメシェギ責任編集

創文社刊

教えの手ほどき

アウグスチヌス
熊谷賢二訳

上智大学神学部編
P.ネメシェギ責任編集
創文社刊

教えの手ほどき〔キリスト教古典叢書 4〕

1964年 3 月31日　第 1 刷発行　　ISBN4-423-39204-6
1993年 5 月10日　第 3 刷発行

編 集 者　上智大学神学部
編集責任者　P・ネメシェギ
訳　　者　熊 谷 賢 二
発 行 者　久保井 浩 俊

定価 2472 円（本体 2400円）

発 行 所　株式会社　創　文　社
本　　社　〒102 東京都千代田区一番町 17—3
仮事務所　〒112 東京都文京区関口 1—44—7
電話 03—3235—4361
Printed in Japan

著作権者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

緒　言

本書の著者である聖アウグスチヌスは、わが国でもよく知られている人であるから、ここで改めて読者に紹介する必要はあるまい。本『キリスト教古典叢書』の中でも、かれの友人ポシディウスの著わした伝記を第一巻の中でとりあげた。それで、アウグスチヌスの生涯について詳しく知りたいと思う読者は、この伝記または、服部英次郎氏訳アウグスチヌスの『告白』（岩波文庫）を参照されたい。

アウグスチヌスは『教えの手ほどき』（*De Catechizandis Rudibus*）という小著を、紀元後四〇〇年ごろ、おそらく四〇五年に書いたと思われる。アウグスチヌスはそのとき四一歳という円熟した年齢に達しており、すでに十年間司教職を奉じていた。

本書は、カルタゴ教会の助祭、デオグラチアスの要請に応じて著わされたものである。かれはアウグスチヌスに向かい、キリスト信者になろうとして初めて教会を訪れた人々に対し、キリスト教の信仰についての手ほどきをどのように行なわなければならないかということについて教えを請うた。アウグスチヌスはデオグラチアスの求めに喜んで応じ、こ

のような手ほどきを実り豊かなものとするための勧告を与え、さらにその手ほどきの具体的な範例を二つ書き加えた。

ここで、当時アフリカのカトリック教会で信仰を求める人が教会に受け入れられる際にとられていた方法を簡単に記述しておくことは、読者が本書の内容を理解されるのに役だつであろう。

当時の教会では、あるひとりの人がキリスト信者になる過程は、かなり長いものであり、さまざまの時期に分けられていた。キリスト信者になりたいと思っている者は、まず、求道者として受け入れられるよう係りの助祭に「求める」。助祭はこのとき、キリスト信者になろうとする動機について質問し、それからキリスト教の信仰についてごく簡単な説明を行ない、キリスト信者の守らなければならない主要なおきてを教える。アウグスチヌスは本書において、この最初の話を行なう方法について論じている。このような最初の話は、長いものではなかったが、きわめて重要なものであった。その目的は、アウグスチヌスも指摘しているとおり、「相手が話を聞いて信じ、信じて希望し、希望して愛するようになる」(四、八)ことであった。すなわち、相手がキリストを信じ、キリストにおいて表わされた神の大きな愛に愛をもって答え、そして、この愛をもって神のすべてのおきてを守り、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

りっぱなキリスト信者になろうと決心するようになることであった。

話が終わってから、助祭は相手に向かい、キリストを信じるかどうか、また、キリストの命に従い偶像崇拝をやめる覚悟があるかどうか質問する。もし相手が承諾すると、簡単な儀式が行なわれ、その人はそれによって「研究者」として受け入れられた。すなわち助祭はまずその人に息を吹きかけ、それから頭の上に手を置きながら額に十字架のしるしをし、終わりに祝別された塩を与えてなめさせたのである。

この式を受けて「研究者」となったものは、以後「キリスト者」(christianus)と呼ばれ、ミサ聖祭の第一部にあずかる権利を受けた。そしてかれらはミサのこの第一部において、他の信者といっしょに祈り、聖書の朗読や司教の説教を聞いた。しかしミサの奉献文が始まる前には、教会から出なければならなかった。

普通研究者は、少なくとも一年間はこのような研究期間を送っていた。しかし、何年間も研究者としてとどまり、洗礼をずっとあとまで延ばす人も少なくなかった。

研究者は、洗礼を受けようと思うと、四旬節の初めにその希望を申し出て、自分の名を洗礼志願者の名簿に登録してもらった。登録が許される前に、教会の側からその人の生活態度や品行について調査が行なわれた。そして、他の人々のつまずきとなるような罪深い

生活を送っている者は、品行を改めて、長期間正しい生活を送ってからでなければ洗礼志願者として受け入れられなかった。

洗礼志願者として受け入れられた者は、四旬節ちゅう、洗礼の準備として種々の務めに服した。かれらは断食やその他の苦業を行ない、しばしば教会に来て、キリスト教の信仰と道徳についての司教の説明を聞いた。残念なことには、その当時アフリカ教会で行なわれていたこの説教がどのようなものであったかということを伝えるような文書は、現在ひとつも残っていない。しかしその内容は、最初に研究者に与えられた上述の入門の話の内容と――もっと豊富ではあったろうが――よく似ていたであろうと推察しうる。この説教は、キリスト教の教義の全般にわたったものであったが、その当時の教会では、洗礼を受けていない研究者に説明してはならない一つの信仰箇条があった。それは、聖体の秘跡についての教義であった。（ある教会、たとえばミラノの教会では、洗礼の秘跡の説明や主禱文「天にます」の説明も、洗礼を受けた者だけに与えられていた。）

復活祭の十五日前、洗礼志願者に使徒信条が教えられた。これは、「信条の授与」と呼ばれていた。洗礼志願者はその信条を書きしるすことを許されず、それを八日後に司教の前で暗唱しなければならなかった。この暗唱は、「信条の返還」と呼ばれていた。信条の

返還を行なった日に、洗礼志願者は主禱文を教えられた。志願者はこの祈りを聖土曜日に暗唱しなければならなかった。洗礼と受洗者の最初の聖体拝領は、復活祭の前夜に行なわれていた。この儀式はアフリカにおいて、たとえばその当時ミラノ教会で行なわれていた儀式と本質的な点で一致している。このミラノ教会の典礼については、アンブロジウス著『秘跡』（キリスト教古典叢書 3）の緒言において述べた、詳しい説明を参照されたい。

洗礼を受けた新信者は、ミラノと同じくアフリカでも、受洗後一週間毎日教会に来て、他の信者たちとともに、特にかれらに向けて行なわれた司教の説教を聞いた。アウグスチヌスがこの洗礼によって生まれたばかりの「子どもたち」に話した、Ad Infantes（子どもたちへ）という美しい説教は、まだ多く残っているが、その説教の中でアウグスチヌスは、聖体とキリスト教徒の新しい生活について、簡単ではあるが非常に美しく論じている。

復活祭後第一の日曜日、新信者は洗礼の後受けた白衣を脱ぎ、他の信者の中に混じって、かれらに向けられた司教の最後の説教を聞く。そのとき司教は、神と教会の善良な子どもとして聖なる生活を送り、永遠の生命を獲得するために努力するようかれらに勧告する。

『教えの手ほどき』と題する本書は、初心者に対する最初の話だけを取り扱っている。

したがって本書は、求道者に与えられる教育の一部であるから、アウグスチヌスの使った教理教授法のすべてを示しているわけではないが、それでも、アウグスチヌスの教理教授についての一般的な法則をよく表わしていると思われる。

本書は、五部に分けられる。第一の序論部で、アウグスチヌスは本書を著わす動機について述べ、それから自分自身の経験に照らしながら、自己の能力に不信の念をいだき過ぎる助祭デオグラチアスを勇気づけている（一―二章）。第二部でアウグスチヌスは、話をする方法に関する原則を与えている（三―七章）。第三部では、相手の知識の程度に応じて、すなわち、学識のある人であるか、無学な人であるか、あるいはその中間に属する人であるかということに応じて、話が適当に変えられなければならないということを述べている（八―九章）。第四部では、この教えの手ほどきという仕事の全過程のなかでいちばん重要であると思われる問題、すなわち、教理教授者が快活さを獲得する方法について論じている。事実アウグスチヌスは、「一番重要なことは、教理を教える人が喜んで教えるには、どうすればよいかということです」（二の四）と言っている。それでアウグスチヌスは、教理教授者のうちに悲しみや倦怠感を起こしうるいろいろな原因について述べ、さらに、このような悲しみや倦怠感を取り除き、教理を教授するとき真の喜びを獲得するためのいろ

いろな手段を教えている（一〇―一四章）。本書のこの箇所は、われわれに、アウグスチヌス自身の心を瞥見する機会を与えてくれるものであって、そこから今日でもなお人々の心をひきつけずにはおかないかれの説教や著作の魅力の秘密がどこにあるかということが明らかにされる。すなわちそれは、アウグスチヌスの説教や著作が喜びと楽しみに満ちあふれているということである。それらを読む人は、アウグスチヌスが愛である神を見いだすとき感じていたあの大きな喜びを理解し、さらに、この神の愛を人々に告げ、人々が神に愛を返すようにすることが、アウグスチヌスにとってどれほど大きな楽しみであったかということを感じるのである。

アウグスチヌスは本書の最後の第五部で、初心者に対する話の具体的な範例を二つ示している。第一のものは長く、一五―二六章にわたっている。第二のものはもっと短いが、第一のものによく似ており、二六―二七章に載せられている。

これらの範例と、三―七章で述べられている話を行なう方法に関する規則とを比較してみると、アウグスチヌスが教えを手ほどきする際にのっとった法則が明らかになる。

とりわけ直ちに認められる特徴は、アウグスチヌスの説明が、ある「話」であるということである。アウグスチヌス自身、初心者のためのこの手ほどきを「話」（narratio）と呼

んでいる。ナラチオとは、ラテン語の修辞学の専門用語であり、話をする人がさまざまの事実を述べ、それによって聞く人の心を動かすことを目的とする話を意味している。したがってアウグスチヌスの教理教育とは、神が世界の創造から現代まで成し遂げられ、将来成し遂げると約束された、神の偉大な救済のわざの「話」なのである。アウグスチヌスはその話を、神がどれほど人間を愛されたかを知り、そして相手が神に愛を返すべくかられるように話している。したがってアウグスチヌスは、教理教育をある概念的な問題から始めようとはせず、また、神の存在を証明したり三位一体の奥義を説明したりすることに時間をかけようともしない。さらに自分の罪とみじめさの体験を出発点とすることもなく、かえってキリスト教を受け入れる正しい動機、すなわち、永遠の幸福、真の永遠の安息を獲得する望みについて簡単な手引きを与えてからすぐ、神が築かれた救済の歴史の重大なできごとについて述べている。

救いの歴史は、世界の創造から始まり、世の終わりにくる最後の審判まで展開していくが、この長い広大な歴史の流れは、一つの明白な中心点をもっている。この中心点は、キリストと教会である。キリスト以前のあらゆるものは、キリストと教会を準備することがらであり、キリスト後に行なわれるすべてのことがらは、キリストのみわざが教会を通し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

て完成されることにほかならない。

教会の昔の伝承に従って（これはあるユダヤ的な伝承から生まれたものであるが、すでにバルナバの書簡（一五の四）、イレネウスの *Adversus Haereses*（五、二八の三）にも見られ、ヒポリトス（*Comment. in Dan.* IV, 23, 6）やキプリアヌス（*Ad Fortunatum*, praef. 2.）にも現われている）アウグスチヌスは世界の全歴史を、創世記の創造の物語の七日に従って、七つの時代に分けている。最初の五つの時代は旧約の諸時代であり、アウグスチヌスは聖書に従ってそれらの時代の主要なできごとを簡単に説明している。原罪、洪水、アブラハムの選出、イスラエル人のエジプトからの解放、バビロンの捕囚、その捕囚からの解放、これらがアウグスチヌスの数えあげている主要なできごとである。アウグスチヌスはこれらすべてのできごとが、今の「第六の時代」にキリスト・イエズスと教会において成就したことがらを前表していたと主張している（旧約の前表的な意味については、アンブロジウス著『秘跡』の緒言の詳細な説明を参照のこと）。アウグスチヌスはその説明の全体にわたり、人類の起源の始めから歴史の終わりにいたるまで、人々を「二つの国」すなわち「不正な人々の国と聖人たちの国」に分ける対立のあることを力説している。この二つの国は、「今のところは肉体に関するかぎり混ざり合っているが、意志の態度を見るとはっ

きり区別されている。しかし審判の日には、肉体的にも区別されるであろう」(一九、三一)。アウグスチヌスが四一三年に書き始めた膨大な著作『神国論』に展開されたこの根本理念は、実に、すでに何年も前からかれの心の中で熟していたのである。

アウグスチヌスは世の第六の時代について論じながら、イエズスの生涯を最も美しく約説している。そこでかれは、すべての教父たちを魅了した、神であるキリストの崇高さと、人となったキリストのへりくだりとを対置させている。こうしてかれは、これほど崇高なものでありながらこれほどわれわれに近いものとなりたもうた神の限りない愛の賛嘆へと、われわれをかりたてている。実にアウグスチヌスによると、「主がこの世に来られたのは、まず第一に、神がわれわれに対するご自分の愛を示し、その愛がどれほど強いかということを表わされるためであった」(四の七)。

アウグスチヌスはイエズスの生涯と死と復活について述べたあとで、使徒たちへの聖霊の派遣、初代キリスト教徒の愛に満ちた生活、パウロの改心と異邦人の改心を記述している。それから、キリストの教会とその歴史について簡単に述べ、この教会において、聖書の昔の予言がどのように成就したかを示している。アウグスチヌスは予言の成就を、キリスト教の信仰の真理を証明することがらとして好んで持ち出している。かれはこの証明

を、普通、次のような形で行なっている。すなわち、イエズスの生涯と死と復活、および、教会の全世界への伸展についてのさまざまの予言は、われわれの目の前で明らかに成就した。それゆえ、キリストが世の終わりにすべての生者と死者をさばくために来られることを告げた預言者たちとキリスト自身の予言も、確かに成就されるであろう、と。

キリストの最後の審判から、第七の、世の最後の時代が始まる。そのとき、すべての人はふたたび生命を与えられた肉体を受け、悪人は正当な罰を受け、善人は神の永遠の休息にはいる。

アウグスチヌスは救済の歴史の説明を終えてから、キリスト教のおきてを守り、邪悪な人々からくるつまずきを警戒し、そして神に信頼し、われわれのすべての善業をこの神に帰すように勧告している。

アウグスチヌスのこの手ほどきは、古代教会で行なわれていた一般の手ほどきの、一つのすぐれた範例である。かれの具体的で生き生きした話し方、簡単ではあるがキリスト教のあらゆる本質的なできごとやあらゆる主要な真理を包含していく話し方は、人々の心を動かし、かれらの心の中に信仰と愛をひき起こすのにきわめて適切なものであった。他の

時代においてはそのときの文化的状態、学問的なふんい気、社会的な環境などにしたがって、キリスト教の手ほどきも、新しい方法を要求するであろう。しかし、あらゆる時代の教理教授者が、アウグスチヌスの『教えの手ほどき』の方法からきわめて多くのことを学びうることは、疑いのないことであろう。

本書の翻訳にあたっては、サン・モールのベネディクト会士によって出版された、Migne の Patrologia Latina の四〇巻、三〇九―三四八ページに再録された原文を使用した。今新しい校正本が準備されているが、まだ出版されていない。

昭和三八年十月一日

編集責任者　P・ネメシェギ

目次

緒言……P・ネメシュギ……一

一　助祭デオグラチアスの願い……一九

二　いちばん重要なことは、教理を教える人が喜びの心をもって教えるには、どうすればよいかということです……二〇

三　教理教授者は、救いの歴史を総括的に述べ、万事において愛をめざすようにしなければならない……二六

四　キリストが来られたのは、神がどれほど人を愛しておられるかということを知らせるためでした。この愛の招きに応じましょう……三〇

五　相手のことばを契機として話を始めなければならない……三五

六　愛という目的をめざして、世界創造から現代にいたるまでの歴史について話さなければならない……三八

七　励ましのことば……四〇

八　高等教育を受けた人々の取り扱い方……四三

九　中庸の教育を受けた人々の取り扱い方……四六
一〇　倦怠感の起こる六つの原因、第一の原因を取り除く方法……四九
一一　第二の原因を取り除く方法……五五
一二　第三の原因を取り除く方法……五九
一三　第四の原因を取り除く方法……六一
一四　第五と第六の原因を取り除く方法……六六
一五　聴衆の多様性に従って、話は変わってくる……七一

第一の模範的な話……七五

一六　真の安息……七五
一七　世の七つの時代……八〇
一八　創造と原罪……八四
一九　二つの国、洪水、イスラエル民族の起源……八七
二〇　イスラエル民族の歴史……九二
二一　バビロンの捕囚、この世の教会……九七
二二　世界の第六の時代、キリスト……一〇一
二三　教会の始まり……一〇五
二四　教会の発展と公審判……一〇九
二五　勧告のことば……一一一
二六　求道者の入会の式……一一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c